令和５年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　大里柳　　小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和５年４月１８日（火）に、６年生を対象として、「教科（国語、算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

１．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語、算数）

教科に関する調査（国語、算数）
①　身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ②　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

⑵　児童質問紙調査

児童質問紙調査
○　学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

３．教科に関する調査結果の概要

(1)　全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

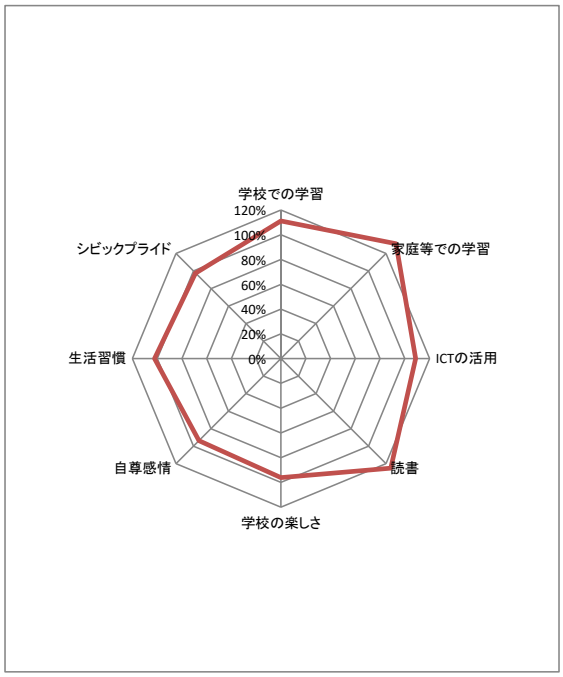
本年度の結果	国語		算数	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	9.4	59
全国	9.4	67	10.0	63

⑵　本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な 傾向や特徴など	○　全ての内容・観点・問題形式で全国平均正答率を上回っている。 ○　無解答率は、全国の無解答率と比べ低い。最後まであきらめず問題に取り組むことができている。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	○　「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う問題の平均正答率が高かった。 ○　「情報の扱い方に関する事項」では、原因と結果など情報と情報との関係についての問題の平均正答率が高かった。 ○　「話すこと・聞くこと」の領域では、目的や意図に応じ、話の内容をとらえ、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめる問題の平均正答率が高かった。 ○　「書くこと」の領域では、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する問題の平均正答率が高かった。 ○　「読むこと」の領域では、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つける問題の平均正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	○　「読むこと」の領域では、人物像や物語の全体像を具体的に想像する問題の無回答率が全国と比べ高かった。	

算数	全体的な 傾向や特徴など	○　全体的に全国平均正答率を上回っている。「変化と関係」「データの活用」の領域は、全国平均正答率を上回っている。 ○「数と計算」「図形」の領域は全国平均正答率をやや下回っている。 ○　無解答率は、全国の無解答率と比べ低い。最後まであきらめず問題に取り組むことができている。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	○　「変化と関係」領域では、伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさの求め方と答えを式や言葉を用いて記述する問題の平均正答率が高かった。 ○　「データの活用」領域では、二次元の表から、条件に合う数を読み取る問題の平均正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	○　「数と計算」領域では、一の位が０の二つの２位数について、乗法の計算をする問題の平均正答率が低かった。 ○　「図形」領域では、図形を構成する要素に着目して、台形や正方形、正三角形の意味や性質について考える問題の平均正答率が低かった。	

４．学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

○　「学校での学習」において、全国平均を上回っている。「授業で学んだことを活かし自分の考えをまとめる活動」、「課題解決のため自分で考え自分から取り組むこと」、「自分の考えをまとめること」、「自分で課題を立てて情報を集め、整理して、調べたことを発表すること」等、すべての質問内容で全国平均を上回っている。
○　「家庭等での学習」において、全国平均を上回っている。家で計画を立てて勉強することや学校の授業時間以外の勉強等、すべての質問内容で全国平均を上回っている。
○　「ＩＣＴの活用」や「読書」について、全国平均を上回っている。しかしながら、「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つか」については全国平均を下回っており、ICT機器の活用方法を工夫する必要がある。特にタブレットを活用して話し合い活動を行っていく。
○　「学校の楽しさ」や「自尊感情」について、全国平均をやや下回っている。子どもが学校が楽しみとなるよう、新しい学校生活様式の中でもできる集会などの活動時間確保をしたり、学級内での児童一人一人の居場所づくりを行い、「あなたがいなければ困る」という自己有用感を高める取組を行うようにする必要がある。
○　「生活習慣」や「シビックプライド」において、全国平均を上回っている。「朝食を毎日食べている」、「毎日同じ時刻に寝起きしている」について、全国平均を上回っている。しかしながら、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」、「あなたが住んでいる地域のことについて、外国に人にもっと知ってもらいたい」については全国平均をやや下回っている。

５．調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

全職員で「スクールプラン」「主題研修」の本校での取組内容について共通認識をし、「学習規律（大里柳小スタンダード）」「書く活動（ノート指導）・ふりかえり」「タブレット端末の効果的な活用」「朝の補充学習（やなぎタイム）」「話合い活動」の重点化を図る。

〈継続して行う具体的取組〉
※　「主題研修」の補充学習の研究体制として、やなぎタイム研究部「①形成的評価を中心とした国語部・算数部」②話合い活動部を置き、全教職員で研究し、よりよい実践を構築していく。
○　補充学習である週５回（月・火・水・木・金）の朝タイムの時間を使ったやなぎタイムでは、火曜日は「国語科」、水曜日は「算数科」で適時タブレットの「ドリルアプリ」を活用し、形成的評価を伴う国語科、算数科の基礎力の向上と、児童の学ぼうとする意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を育成する。木曜日は、「話合い活動」で適時タブレットの「スカイメニュー」を活用し、自分の考えをグループやクラス全体に伝える活動（話合い活動）を確立し、自ら考え伝える力を育成する。
○朝タイムの「話合い活動」については、各教科等の話合い活動の礎となるようにする。全職員で、一単位時間の授業の中で、必ず「話し合う活動」を取り入れることを全教科で取り組む。その際、やなぎタイムの話合い活動を生かして行う。
○　全職員で、ノート指導において「めあて・まとめ・自分の考えのあるノートづくり」を行う。さらに、思考の足跡が読み取れるノートづくりを指導し、自分の思考を基に自分の考えを他の人に説明できるようにする。
○　考えの広がりや深まりを意識化できるように、発表や振り返りの仕方を工夫する。（○○さんの考えを参考にして・○○さんの考えを取り入れて）

〈国語科の具体的取組〉
○　導入時に何のために何について活動を行うのか明確にする。
○　目次や牽引、見出しに着目して読んだり、キーワードを見つけながら読んだり、図表と結びつけて話したりさせる。
○　自分の考えを整理する時間（一人活動・振り返り）をとる。
○　多様な書く活動（自分の考えを何字以内に書かせたり、筆者の考えを基に記述させたり、複数の条件を基に記述させたり）を考える。

〈算数科の具体的取組〉
○　図形を構成する要素に着目して、台形・正方形・平行四辺形の意味や性質、構成の仕方について考えさせる。
○　「書く」活動の充実を行う。　自分の考えがあるノート指導を行ったり、テープ図や数直線をノートに書かせて問題を解かせたり、複数の情報から分かることを書いて話し合わせたりさせる。
○　「数と計算」では、一の位が０の二つの２位数について、乗法の計算をする。

② 家庭生活習慣等に関する取組

全職員で「スクールプラン」の本校での取組内容について共通認識をし、「家庭学習」の重点化を図る。

〈継続して行う具体的取組〉
○　「家庭学習の手引き」を基に、低学年３０分程度、中学年４５分程度、高学年６０分程度の家庭学習について、実践化が図られるように働きかける。
○　「家庭学習の手引き」を基に、主体的に複数教科の自主学習に取り組み、家庭学習の素地を作るために学期に１回、１週間の家庭学習ウィークを行い、「自ら考え、やりぬく子ども」を育てる。家庭学習では、学校から出る宿題と復習や予習のほか、読書や課題を自分で見付けて行う自主学習を合わせ、補充学習を行う。
○　家庭学習の手引きを全家庭に配布し、家庭と連携した取組を推進し、家庭学習の習慣化を図る。全職員で、「家庭学習頑張りカード」を基に計画的に家庭学習に取り組むように指導する。

〈自尊感情を高める具体的取組〉
○児童が活躍できる場面の実現
・　本校のキーワード「ほめほめ：成功体験を積み重ね自尊感情を高める」「わくわく：楽しい学校にする」「にこにこ：　温かく笑顔あふれる学校にする」を実践する。
・　児童会を中心に「あいさつ運動」に取り組む。
・　代表委員会での取組「柳っ子全員であったかことばを集めよう」で各学級の学活や帰りの会で互いを認め合い、褒め合う取り組みを継続していく。
・　学級では、児童が成就感・達成感を味わうことができるように役割を与え、児童への肯定的な言葉がけを行う。発表のときや振り返りのときに友達の考えを取り入れたり、ヒントにしたりしたことを伝えることで互いに自己有用感を高める。
・　縦割りグループを軸とした異年齢集団での活動を通して、思いやりの心や自尊感情・自己有用感を高める特別活動の充実を図る。
・　「対人スキルアップ」に短時間で取り組み、児童のコミュニケーション能力を高める。
・　「北九州子どもつながりプログラム」を計画的に実施し、児童同士の人間関係を深める。また、学級や学校への所属感を高め、有用感をもたせるために、低学年では、当番活動、中学年では当番活動と係活動、高学年では委員会活動を充実させる。
○状況や背景に気を配った、きめ細やかな対応
・　学期に１回の「いじめアンケート」を実施し、全児童に面談をすることにより、早期発見に努めるとともに誰もが相談しやすい体制の整備を行う。
・　児童に寄り添い、個別の教育相談や電話対応、家庭訪問を行う。